

格下げ変形について

(On Downgrading Transformation)

河 野 武

1. 序

補文を主語や目的語にとる動詞についての研究は Rosenbaum (1967), Kajita (1967), Kiparsky & Kiparsky (1970), Perlmutter (1969), Karttunen (1970), その他数多くなされ、その統語的・意味的構造の理解が深まりつつある。分析の深さが増すにつれ、今まで補文をとる動詞とは考えられなかった助動詞や、必ずしも音形を持たない抽象動詞の [+Causative], [+Inchoative], [+Performative] 等も、補文をとる動詞として扱かう立場も生まれている。また、主体文の動詞だけではなく、否定や疑問の要素に敏感な whether の補文標識 (Complementizer) としての特性が Bresnan (1970) によって論じられている。このような一連の研究から明らかになったことは、(1)概略的に言って動詞は補文のとる補文標識によって下位分類されること、(2)主体文の動詞と補文の動詞とは異なった種類の動詞に属すること、(3)補文構造で、上位の動詞と下位の動詞との間に階層的序列があること、等である。ここではわれわれが観察することができる複雑で多様な文に、単なる形式上の関連づけのみではなく、意味的相関をもつけようとする立場から、補文構造・格下げ文・文副詞の関係、特に補文構造と格下げ文とを結びつけている文法規則の特質とそれに関連する意味について検討してみることにする。

格下げ変形 (Downgrading) は Kajita (1967) の Ph.D. 論文の中で提案された変形規則で、筆者も、それにおう所が大きい。しかし、具体的な資料を観察してみると Kajita 論文での格下げ変形の適用条件は、ある面ではきつすぎ、またある面ではゆるすぎることに気づいた。そこでまず Kajita 論文での適用条件に付帯条件をつけることを当面の目標にしたい。

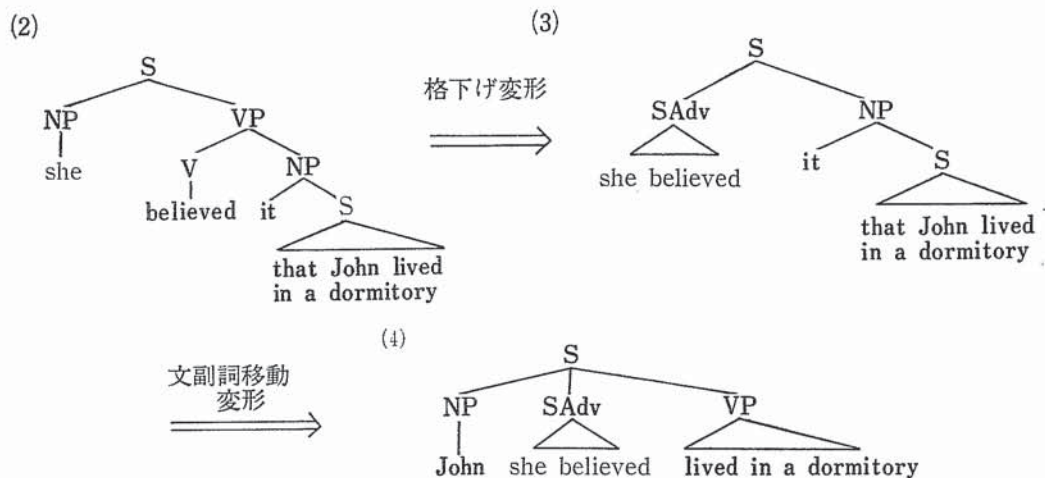
2. 格下げ変形の定義

格下げ変形とは、補文をとる動詞を含む主体文の成分が補文から分離され S_{Adv} (文副詞) の節点に従えられる変形規則である。格下げされた要素は後続の文副詞移動変形で、補文の文頭・文中・文尾等のしかるべき場所に移される。この変形操作は主体文の側からみれば一種の文副詞化変形であり、補文から見れば、補文全体の一種の主題化変形である。入力文での主体文は格下げされて主体文としての地位を失い、逆に入力文の補文は格上げされて新しい主体文になる。

ここで、主体文といい、補文と述べてきたが、実は上の定義は二種類の主体文と補文の関係を同表わしたものである。すなわち主語の位置にある補文と、動詞句に含まれた補文がそれである。目的格の補文の中に主体文が格下げされる例を考えてみよう。

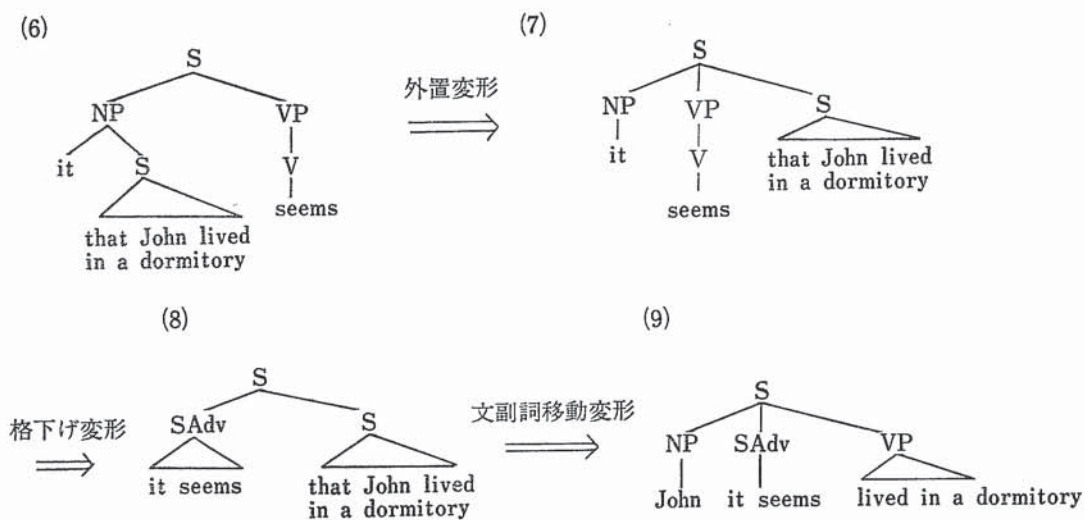
- 1) a. She believed that John lived in a dormitory.
- b. John, she believed, lived in a dormitory.

(1) a から (1) b が派生する過程は次のようになる。¹⁾



(1) bの文は(1) aの基底形である(2)に格下げ変形が加えられ(3)の構造をもった文が生じさらに文副詞移動変形が働いて(4)すなわち(1) bになる文が派生する。(2)と(3)の比較から、ここで格下げされるのは主体文の主語+動詞であることがわかる。次に(5) aから(5) bが派生される過程を追ってみよう。なお(5) aは派生の中間形であり、深層形は(6)のような構造を持っている。

- (5) a. It seems that John lived in a dormitory.
b. John, it seems, lived in a dormitory.



(7)と(8)の比較から格下げされるのは it seems であることがわかるが、これらは深層構造(6)では主体文の主語の一部+動詞であることが理解される。上の二つの場合を考え合わせると、格下げされた要素が挿入されるのは、目的語の補文であっても、外置された補文であってもよいことがわかる。

3. 格下げ変形の適用条件

ここでは格下げ変形に課すべき適用条件について述べる。条件は(1)補文に対するものと(2)主

体文に対するものとの二つに大別できる。

3.1 補文への条件

3.1.1 補文の種類についての条件

補文は深層文の主語・目的語の位置に現われる名詞句の機能をもった文である。これらには、独立文との形式上の区別をするために、補文標識の *that, whether-or, for-to, 's-ing* が与えられている。補文を主語または目的語としてとることができるか否か、あるいは補文の種類を選択については主文の動詞が決定する。補文の種類は補文につけられた補文標識によって分類される。格下げ変形は、すべての補文に対してなされるのではなく、その他の文法的条件を一定にすると、補文の種類による制限が働いているとしか考えられない場合がある。試みに、主体文は格下げ変形の適用条件を備えているとして、どのような種類の補文がこの変形を許すのか考察してみよう。それぞれの一対の文の b の文は a の文の基底形から派生したと考える。

- (10) a. She believed that John lived in a dormitory.
b. John, she believed, lived in a dormitory.
- (11) a. She asked whether John lived in a dormitory.
b. Did John, she asked, live in a dormitory?
- (12) a. She asked why John lived in a dormitory.
b. Why, she asked, did John live in a dormitory?

以上の対の文は、(a)の文に格下げ変形、文副詞移動変形の他に補文標識の消去やその他付随した変形をへて文法的な文(b)をそれぞれ派生した場合である。次に非文法的な文を生み出す補文の例を下に示そう。

- (13) a. It did not matter whether John lived in a dormitory or not.
b. *Did John, it did not matter, live in a dormitory?
- (14) a. She liked John's living in a dormitory.
b. *John's, she liked, living in a dormitory.
- (15) a. She hated John to live in a dormitory.
b. *For John, she hated, to live in a dormitory.

例文から明らかなように、*that*、疑問と関係した *whether* (疑問詞付き疑問文を含む) をとる補文のみが格下げされた要素を受け入れる。(11)と(13)から *whether* には疑問を表わすものと、単なる未決定を示すそれとの二種類があり、疑問の *whether* のみが格下げ変形を許すことがわかる。以下 *whether* というとき、特に指定しないときは疑問の場合を指すことにする。*that* と *whether* をとる補文とそれ以外の補文との形式上の違いは、前者が、主体文とは独立の時制を持つのに対し、後者は、主体文の時制を参照することによってのみ時制が決定され、そのみでは主文と同じ「時」であるか、主文より先行する時であるかの違いを助動詞の *have* または *had* で示すだけである。格下げについての上の条件は次のように要約できよう。

- i) 補文は補文標識に *that* または疑問の *whether* をとり、
- ii) 独立文としての適性条件が満たされていること。

3.1.2 補文内の構成要素についての条件

主体文は補文の構成要素に様々な制約を課している。格下げ変形と係っていると思われる制限の一つは時制上のそれであり、もう一つは、主体文の [+Affective] な要素の補文の [+Indeterminate] な要素への制限である。まず時制上の制限から考察してみよう。それぞれの組の a の文の基底形から b の文が生成された。

- (16) a. I hope John $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{brings} \\ \text{will bring} \end{smallmatrix} \right\}$ that pretty secretary with him.
 b. John, I hope, $\left\{ \begin{smallmatrix} * \text{brings} \\ \text{will bring} \end{smallmatrix} \right\}$ that pretty secretary with him.
- (17) a. He intended that Nancy should be invited.
 b. *Nancy, he intended, should be invited.
- (18) a. I warned you that Nancy might be late.
 b. *Nancy, I warned you, might be late.

(16) a の hope は補文の時制がそれ自身より後続時であることを要求する動詞であるが、ここでは補文の時制は主体文の動詞 hope によってすでに自明なので、文形式上、未来形、現在形のいずれをとってもよいが、(16) b では主体文が格下げされ、逆に補文が格上げされた結果、主体文の補文に対する制限が解かれているために文形式上、現在時制ではなく、未来の助動詞を必要としていると解される。(17) (18) の should, might はそれぞれ「義務」や「丁寧」の意味を持った法の助動詞ではなく、‘Nancy *shall* be invited,’ ‘Nancy *may* be late’ が、それぞれ intended, warned の過去の時の参照点によって整理された結果、過去時制になったものである。これらの時制は、格上げされた文の中ではあってはならない要素となる。上の例は補文では不完全に明示されていた要素が新しい主体文の中では、完全な明確化が必要になった場合 (16) b か、補文にあった要素が格下げ変形の結果独立文の地位を得たときに、そのまま持ちこまれた場合 (17) b, (18) b かである。これらとは別に、格下げ変形の入力文の時制がうめられていなかったためにおこる禁止が Kajita (1967) で指摘されている。

- (19) a. I request that all the term papers be turned in by the end of this month.
 b. *All the term papers, I request, be turned in by the end of this month.²⁾

例文 (19) a で補文の be の時制が明示されないまま (19) b の形に変えられたため、前に述べた独立文としての適性条件に合わず、したがって非文法的な文を生み出したと思われる。時制の範疇が十分展開されていることは独立文の必須条件である。この仮説の唯一の例外と考えられる命令文も、実はいくつかの証拠から深層構造では時制が与えられており、後の規則によって主語＋助動詞(時制)が消去されたと考えることができ、この仮説の強い反証にはならない。³⁾

次に補文が [+Indeterminate] を含む場合を調べてみよう。

- (20) a. It's astonishing that anyone ever liked Nero at all.
 b. *Anyone, it's astonishing, ever liked Nero at all.
 c. *Someone, it's astonishing, sometimes liked Nero at all.

(20) a の補文の anyone, ever...at all は深層では [+Indeterminate] という特徴を与えられており、主体文の動詞 astonishing の持つ [+Affective] に刺激されて [+Indeterminate] が [+Indefinite] に変えられ、辞書項目が選ばれて派生した文である。上に見るように、主体文の動詞に拘束されている [+Indeterminate] を含む補文は独立文になることができず、逆に主体文の格下げを許さない。これらの事実を合わせると、補文内の要素についての制限は次のようになる。

i) 補文が主体文の要素を参照せずに明示することができない要素(時制, [+Indeterminate])を含むとき、主体文は格下げを禁止される。

3.2 主体文についての条件

3.2.1 文型上の条件

まず、主体文が、肯定文・命令文・疑問文のとき、文型の違いによって格下げ変形の適用に干渉

が起こるかどうかが調べてみよう。

- (21) a. It finds that the youthquake has faded to an indecipherable rumble.
b. The youthquake, it finds, has faded to an indecipherable rumble.
(22) a. Remind him that the meeting is on Friday.
b. The meeting, remind him, is on Friday.

(21), (22)から肯定文・命令文に関しては、文型の違いは格下げ変形に抵抗しないといえる。しかし、主体文が疑問文のとき、事情は複雑になる。

- (23) a. Can you suggest where this table should be put?
b. Where, can you suggest, should this table be put?
(24) a. Can you tell me how high it is?
b. How high, can you tell me, is it?
(25) a. Can you inform me whether this train stops at Luton?
b. *Does this train, can you inform me, stop at Luton?

(23), (24)の文法性と(25)の非文法性の違いは、いずれも主体文・補文が疑問文であるが、(23)(24)は補文が疑問詞疑問文であり(25)は Yes-no 疑問文を補文にとっていることに起因するとみられる。次に true と surprising をそれぞれ主文の動詞として持つ疑問文の場合を調べてみよう。

- (26) a. It is true that John is going to retire next year?
b. *John, is it true, is going to retire next year.
c. *Is John, is it true, going to retire next year?
(27) a. Is it surprising that John has been found guilty?
b. *John, is it surprising, has been found guilty.
c. *Has John, is it surprising, been found guilty?

(27) a の補文 John has been found guilty はいわゆる前提文で、主体文が否定文でも疑問文でもその真理値は不変である。ところが(27) b では格下げ変形の結果、もとの補文は前提文ではなくなり、主張されている。(27) c は、もとの前提文が疑問文化されており、(18) a と意味的に矛盾し、したがって非文法的な文であると言える。(26)は(27)とは異なり、主体文の動詞の true の性質上、補文の真理値は主体文によって決められる。すなわち、意味的に主体文が否定されれば補文も否定され、主体文が疑問化されれば、補文もまた疑問化される。(26) b では格上げになった補文は(26) a の場合とは異なり John is going to retire next year を主張している。(26) c は論理的には(26) a を正しく反映した文であるが、補文を疑問文化する文形式上の手がかりの補文標識 whether を深層に持たないために構文上の曖昧さをもたらしている。以上の現象に対しては次のような制限を加えればよい。

i) 疑問形の主体文は、whether を補文標識にとり、しかも疑問詞 wh- を含む補文の中のみ格下げされる。

3.2.2 主体文の動詞の条件

主体文が文型に関する制限を通った場合、主体文の動詞の特性に課せられた制限によってさらに格下げ変形の適用がスクリーンされる。以下、事実動詞⁴⁾、半透明動詞、未来動詞、透明動詞その他の動詞と格下げ変形との関係とを検討してみることとする。

3.2.2.1 事実動詞

動詞の分類特徴である事実性に関して、事実動詞と非事実動詞があることが Kiparsky & Kiparsky (1970) によって指摘された。格下げ変形に関係するのは、これらの動詞のうち補文に that

と whether を補文標識にとる類だけを考慮すれば足りる。実際には whether をとる事実動詞はないので、that をとる場合について考えればよい。比較のために非事実動詞を先に、次に事実動詞をあげる。

(28) John, I believe, is ill.

(29) The door, it seems, is closed.

(30) *John, I regret, is ill.

(31) *The door, it is odd, is closed.

(28), (29)は非事実動詞を派生源の主文にもっていたので格下げ変形の適用を受けるが、(30)の regret, (31)の odd は事実動詞であるため、格下げ変形の結果非文法的な文になったのである。事実動詞と非事実動詞の行動の違いは、主体文と補文の関係の違いを反映している。事実動詞の補文はいわゆる前提文であり主体文の主張に含まれないが、非事実動詞の補文は、主体文の形づくる世界の範囲内で主張される。例えば主体文の動詞が believe, think, seem 等では「話者の判断」の世界で、また possible, certain, likely 等では「可能性」の世界で補文は主張される。事実動詞の補文は格上げされると主張の範囲に入るため、禁忌されると考えられる。

3.2.2.2 半透明動詞

半透明動詞は possible, apparent, certain, likely の類の動詞で、これらは繫辞の be と共に用いられ主語に補文をとる。これらの動詞は odd, surprising, regrettable 等の事実動詞とは意味的に異なる。前者はそれぞれの半透明動詞に内在する個別的な意味規準によって補文の内容が主張されるが、後者では補文は主張から外されている。半透明動詞は外置変形が義務的であり、格下げ変形がかかる前の文はおおよそ次のような形を持っている。

(32) a. It is $\left\{ \begin{array}{l} \text{possible} \\ \text{apparent} \\ \text{certain} \\ \text{likely} \end{array} \right\}$ that John flunked out a couple of times.

この文に格下げ変形を適用すると下に示すように一様に非文法的な文を生み出す。

(32) b. *John, it is $\left\{ \begin{array}{l} \text{possible} \\ \text{apparent} \\ \text{certain} \\ \text{likely} \end{array} \right\}$, flunked out a couple of times.

なお、半透明動詞の apparent と共通の語幹を有していると思われる appear は格下げ変形に関してはまったく異った行動を示している。

(33) John, it appears, flunked out a couple of times.

appear は格下げ変形を許す動詞で seem と同様、後で述べる透明動詞に属するものである。

3.2.2.3 未来動詞

非事実動詞のうち補文の表わす内容が主体文の示す「時」からみて未来に実現するであろうことを示す一群の動詞がある。これらを未来動詞またはM透明動詞と呼ぶことにする。expect, predict, foretell 等がそれで、これらを含む主体文が格下げされると許容度が落ちる。低い許容度の文には？印を付けることにする。

(34) a. I expect that it was rushing for that bus that caused it.

b. ? It was, I expect, rushing for that bus that caused it.

(35) a. I predict that John will fail to win the prize.

b. ? John, I predict, will fail to win the prize.

(35) bの主動詞類 will fail は格下げされた動詞 predict の後続時であることは明瞭であるが、こ

の文は許容度が低い。(34) a は主文の expect が補文の was rushing より時間的に先行しており、一見未来動詞の定義と矛盾しているように思えるが(34) a はさらに深い文

(36) I expect that it proves to be true that it was rushing for that bus that caused it. から派生したと考えられる。つまり(36)も(34) a も「それをもたらした理由がバスに大急ぎで乗ろうとしたことによるという推論が正しい」ことを予期している。したがって(36)の expect は一つ下の動詞 prove と時関係を持っていると思われる。しかし、格下げに関してはこの文は(35) b と同様、完全に文法的な文とはいえない。また(35)の predict と関連して predictable があるが、この動詞はすでに述べた半透明動詞に属し、格下げされると非文法的な文になる。

(37) a. It is predictable that John will fail to win the prize.

b. *John, it is predictable, will fail to win the prize.

3.2.2.4 補文と同格の it を消去できない動詞

一般に補文と同格の代名詞は派生の過程で、目的格の補文の場合、受身変形を受けたり、主格の補文の場合、外置変形を適用されたりして補文と引き離された場合は別として、表層構造に近い段階で it と補文が隣り合ったとき、通常は消去されるが、ある種の動詞はその変形をブロックする。これらの動詞を持つ主体文は格下げ変形できない。例えば

(38) a. You may depend upon it that every member of the committee will support your proposal.

b. *Every member of the committee, you may depend upon it, will support your proposal.

(39) a. I will see (to it) that everything is ready in time.

b. *Everything, I will see (to it), is ready in time.

(38) b, (39) b に共通なことは、格下げされた要素内の動詞 depend upon, see to が、もとの補文と同格の it を目的語の痕跡として残していることである。上の文の動詞と関連した動詞に owe がある。

(40) a. He owes it to his father's influence that the committee appointed him to the position.

b. *The committee, he owes it to his father's influence, appointed him to the position.

(40) a は深層構造では it と同格の補文が、動詞句から外置された形である。この連鎖に格下げ変形を適用すると(40) b のような非文法的な文が出てきてしまう。(38)(39)(40)に与えるべき制限を一般化すると、次のようになる。

i) 格下げ変形を受ける要素は

$$X + \left\{ \begin{array}{l} [\text{vpV} + \text{Particle} + \text{it}]_{\text{vp}} \\ [\text{vpV} + \text{it} + \text{Prepositional P}]_{\text{vp}} \end{array} \right\} + Y$$
 と分析されてはならない。

なお、この条件で格下げ変形の対象となる連鎖に文法関係の指定が必要であり、単に「補文と同格の it を含む主体文は格下げできない」と述べたのでは不十分であることは it + V と分析される要素が次のように格下げされることから理解されよう。

(41) John, it seems, believes that Mary is ill.

3.2.2.5 透明動詞

事実動詞をはじめとして半透明動詞、未来動詞、see to 等の動詞は、すべて格下げ変形の適用を制止することが明らかになった。そこで最後に、格下げ変形を自在に受ける透明動詞に触れてお

こう。この類の動詞は unmarked class であり、もし上の格下げ変形を禁止する動詞が網羅的であり、適用条件が適切であれば、いちいち列挙する必要はない。典型的な透明動詞の think, believe, suppose を一例にとってみよう。

- (42) a. John $\left\{ \begin{array}{l} \text{thinks} \\ \text{believes} \\ \text{supposes} \end{array} \right\}$ that the isolation begins at home.
 b. The isolation, John $\left\{ \begin{array}{l} \text{thinks} \\ \text{believes} \\ \text{supposes} \end{array} \right\}$, begins at home.

これらの透明動詞は何の支障もなく格下げされるようである。しかし、これらの動詞が否定辞をとるとこの変形は自由に適用できなくなる。例えば

- (43) a. John doesn't think that the isolation begins at home.
 b. *The isolation, John doesn't think, begins at home.
 (44) a. No one seriously thinks that the isolation begins at home.
 b. *The isolation, no one seriously thinks, begins at home.

否定辞を伴った主体文の動詞は補文を拘束する力が大きく、したがって両者は切り離すことが不可能であるためである。格下げが起こった文(43) b (44) b では、もとの補文に当たる部分は、もはや否定辞に拘束されておらず、主張の対象になっており、格下げされた要素の否定の主張とぶつかり合う。

否定を表現する文法的手段は、否定辞の not, no の他, impossible, unlikely, thoughtless 等の形態素や doubt, questionable, beyond our understanding 等、語いや句に包含された意味として表わされるが、これらはすべて格下げ変形を止める。

- (45) *John, I doubt, believes that the U. S. is invincible.

否定要素について興味深い現象は、それらが二つ重なると否定の意味を相殺するという点である。例えば doubtless, beyond question 等は、結果的に肯定の主張をしていると考えられる。しかし否定要素の相殺によって得られた肯定は、本来的な肯定とはさまざまな点で異なる。例えば前者の格下げ変形の結果の文法性はまちまちである。

- (46) *John, it is doubtless, believes that the U. S. is invincible.
 (47) *John, I $\left\{ \begin{array}{l} \text{do not} \\ \text{hardly} \end{array} \right\}$ doubt, believes that the U. S. is invincible.
 (48) John, it is beyond question, believes that the U. S. is invincible.
 (49) John, it cannot be doubted, believes that the U. S. is invincible.

これらの文法性の違いは、単に否定要素が二つ重なると肯定に変わるといった機械的な説明では不十分で、恐らく文体的な許容・排除作用があることを暗示している。否定要素の直接的な否定の(46)(47)は排され、婉曲的な前置詞句(48)や、受身形の(49)が受け入れられている。

この節では格下げ変形に関して unmarked な動詞の透明動詞が、否定の要素を一つ持つてはならないこと、二つ以上否定の要素を持つときはある限られた場合のみ格下げされることを述べた。

3.3 格下げ変形の適用条件(要約)

格下げ変形は入力文が次のいずれの場合にもあてはまらないならば、操作が許される。

- i) 補文が, that, 疑問文と関係した whether 以外の補文標識に導かれているとき,
- ii) 主体文が疑問文で補文が wh- 疑問文でないとき,
- iii) 補文の中に主体文の要素を参照せずに明示することができない要素 (時制や統語特徴の [+Indeterminate]) を含むとき,

- iv) 主体文の動詞がM透明動詞、半透明動詞、不透明動詞、その他指定された動詞のとき、
 v) 透明動詞が内在特徴であれ、否定辞であれ一個の否定の要素を持っているか、または二個の否定要素を持っているある動詞のとき。

下に代表的な動詞の分類を掲げておこう。

U 透明動詞	add, admit, acknowledge, assure, believe, claim, concede, confess, conclude, contend, declare, discover, explain, feel, insist, note, recall, report, suggest, say, suppose, think, happen, occur to, turn out, NEG doubt, NEG deny
M 透明動詞	expect, foresee, foretell, predict
半透明動詞	apparent, certain, likely, possible, predictable, probable
不透明動詞	amuse, bother, odd, regret, surprising, NEG(=not, no), questionable, unexpected
その他格下げを禁止する動詞	depend upon, see to, owe to

4. 格下げ変形と文副詞化変形との関連性

格下げ変形は補文構造を持つ文の主体文の要素が S_{Adv} の節点に支配される変形であることはすでに述べた。文副詞化変形は格下げ変形と同じ構造を持った入力文の主体文の要素を形態的に関係のある文副詞に変える変形であるとする。厳密な定式化はここではしないことにして二、三の場合を例示するにとどめたい。

- (50) a. It is apparent that John left early.
 b. Apparently John left early.
 (51) a. It is surprising that John left early.
 b. Surprisingly John left early.
 (52) a. It is supposed that John left early.
 b. Supposedly John left early.

文副詞化変形はそれぞれの組の a の文の基底形から b の文を導く。注意すべきことは、大まかにいって、格下げ変形を受ける動詞と文副詞化変形を受ける動詞は分布上相補的であるという点である。格下げ変形の適用を止められた動詞の半透明動詞 (possible の類)、不透明動詞 (surprising の類) は文副詞化変形を受けることができる。なお M 透明動詞 (expect の類) は対応する副詞形を持たないので当然この変形は無効である。一方、格下げ変形を許した透明動詞は非常に多数にのぼったにもかかわらず、文副詞化変形を受けるのは allegedly, admittedly, assumedly, reportedly, supposedly 等の基になった少数の受身構造をとる動詞、それに seemingly に関係していると思われる seem くらいのもので、他の透明動詞は対応すべき文副詞を持たない。

格下げ変形と文副詞化変形とは適用条件を多少異にしている。格下げ変形は透明動詞に否定の要素が一個付けられると適用が止められ、二個付けられるとある場合だけが変形の適用を受けた。文副詞化変形の適用条件は、格下げ変形の場合とまったく同じ条件が必要な場合と否定の形態素を一個持った動詞でも適用を許す場合とがある。動詞と文副詞の対応形だけを挙げてみよう。

- (53) a. impossible → *impossibly
 b. questionable → *questionably
 (54) a. unexpected → unexpectedly
 b. doubtless → doubtlessly

(53) は否定の要素が形態素や内在特徴としてあった場合は文副詞化の過程が制止される場合、(54)

はそのような制約がない場合である。

その他のさらに厳密な検討を要する格下げ変形と文副詞化変形の違いとして、派生源の文の主文の主語の名詞句や時制の問題があろう。例えば格下げ変形の対象になる文の主文の主語や時制に関しては特に制限がないようであるが、文副詞化変形の対象のそれは非人称の *it* を多くとり、また時制の選択も限られている傾向がある。いずれにせよ、格下げされた要素と文副詞化変形から派生した文副詞とが同じ文副詞の仲間であって、分布上相互に補い合っているということは興味深い事実である。

5. 補文構造と格下げ又は文副詞の意味的関連性について

前節では、補文構造、格下げ、文副詞の統語的關係について論じたが、ここでは、それらに内在する意味的関連性について考察してみよう。意味的な類似、または相違関係を調べる手順として、まず補文構造と格下げ、次に補文構造と文副詞を比較してみることにする。⁹⁾

5.1 補文構造と格下げ変形を受けた連鎖との意味距離について

異なった形式が与えられた任意の二つの文が、完全に意味が同じであるか、または同じになる場合があるか断言することはむずかしい。また、言語分析に当たって、「意味」をどのような対象として限定するかによって、先の問は答えることが可能になる。意味を言語以外の実体、例えば「文脈」等から説明するのではなく、言語の枠内で記述しようとする、意味の心理的実体の中で、比較的把握しやすい認識の意味 (cognitive meaning) がまず問題にされ、感情的意味は後回しにされることになる。そして、Katz & Postal (1964) の意味解釈規則にならえば、文の意味解釈は表層構造ではなく、基本的な文法関係が示されている深層構造に対して、それぞれの辞書項目から句、文へと意味が投影されてゆく。これによって文は辞書項目の意味の単なる平面的な合算ではなく、文法的な関係に由来する意味、例えば、主語と述語関係、修飾語・被修飾語の関係等も合わせて解釈できる。以上に加えて文の表層形に文型の違いとして生ずる肯定、否定、命令、疑問等の要素も抽象的な意味として、文全体の意味の一部をなすと考えられる。以上はわれわれが表層文を手がかりに跡づけている「文」の意味として十分であろうか？ 深層構造は同一でも表層構造が異なると微細な意味の違いを生ずる例として次の一組の文をとりあげてみよう。

(55) a. Telesessions discovered that an actual moderator is unnecessary.

b. An actual moderator, telesessions discovered, is unnecessary.

(55) b は (55) a の深層形から格下げ変形をへて派生した文である。(55) a と (55) b とは深層構造で与えられる抽象的な意味のレベルで同義であるかも知れないが、支配関係や要素の配列順序が異なる表層文ではもはや「同義」であるということとはできないように思える。(55) b の意味を考えると、われわれはこの文が表層形では、an actual moderator is unnecessary と telesessions discovered の二つの部分から成りたっており、前者の意味内容は後者より話者の判断する伝達内容の相対的な重要性が高い。すなわち (55) b においては、an actual moderator is unnecessary は伝達内容として第一義的であり、telesessions discovered は第二義的である。一方 (55) a は主体文の要素も補文の要素も含めた、文全体を第一義的な伝達内容とする。ただし、この文の伝達上の効果は実際には文脈から想定されたことがらや予測された内容が含まれているので必ずしも (55) a の文全体が第一義的な伝達内容でなくてもよい。すなわち、聞き手の知識量に応じて、この文の全体またはある部分が、第一義的な伝達内容となる。伝達内容の相対的重要性などといったものはせいぜい意味解釈規則、しかもむしろ言語使用に関係する発話意味 (discourse meaning) くらいのものだと考えられるかも知れない。しかし、この意味範疇は格下げ変形の適用に強く作用している。格下げされた要素は第二義的な伝達内容となる事実を強める言語事実がある。例えば主体

文の主語や動詞が強めを受けていると、すなわち格下げされる要素が第一義的な伝達内容であると、格下げ変形は起こらない。例えば

- (56) a. *You yourself* said that the trash would be piled to the ceiling.
b. ? The trash, *you yourself* said, would be piled to the ceiling.
(57) a. *You did* say that the trash would be piled to the ceiling.
b. ? The trash, *you did* say, would be piled to the ceiling.

(56) a では主体文の主語 *you* が再帰代名詞を伴って強めを受けているため、格下げ変形後の(56) b は非文法的になる。⁶⁾ (57) a は強めの助動詞 *do* が用いられており、したがって(57) b は非文法的である。⁶⁾ 以上の観察から、最も強い主張の対象になった要素が、弱い主張の対象になった要素しか置くことのできない文中の座を占めることは矛盾をおこすことがわかる。

一般的に、格下げされた要素は意味内容が希薄になるが、この傾向は補文の後に現れた場合に著しい。例えば

- (58) That's one of the differences, *you know*.
(59) You're not thinking of wearing it, *I trust*.
(60) Bring me the biscuit, *will you* ?

上の例で *you know*, *I trust*, *will you* 等是一種の付加詞で、それぞれの文で話者の第一義的主張についての話者の立場や、聞き手に対する同意や依頼を表わす *modality* を含んでいる。ここでの *know*, *trust* はそれぞれ 'be acquainted with' 又は 'firmly believe in the honesty, veracity, justice, strength etc., of a person or thing' 等の各々の語の持つ中心的な意味を失っている。

以上概観してきた、補文構造と、それから格下げ変形を受けて派生する文との意味的距離は、非常に微細ではあるが、見過ごすことのできない開きをもっているように思われる。これを記述するには二つの方法が考えられる。一つは、要素の位置転換や、付加、消去等の変形に伴って意味の変化を生じたとき、そのつど深層構造で与えられた意味解釈を修正してゆくやり方である。もう一つは、文の派生の各々の段階で意味をチェックせず、意味解釈を深層構造と表層構造と二度行なう立場である。後者の立場では、深層構造は文の抽象的な意味情報しか提供せず、表層文で選択された主語や主題が表わす意味情報は表層構造がもたらすと考えている。ここでは仮に後者の理論を採用することにする。深層構造と見較べて、表層構造に文としての最終的な意味解釈を与えるときに、例えば次のような意味解釈規則があると考えられる。

意味解釈規則 1. 英語のすべての表層文の意味は、話者の主張 *Assertive* の範囲内でなければならない。

Assertive は意味範疇であり、それ自身は形式を持たない。すべての文は、話し手と文によって伝えようとしている事実との関係を聞き手に向って述べたものである。すなわちすべての文は話し手の *Assertion* として存在すればよく、哲学的命題のように真か偽かの *Statement* を示す必要はない。*Assertive* はことばによる伝達を可能にしている前提だと考えられる。*Assertive* の下に *Performative* や *Expressive*, *Reportive* 等のさまざまな話し手と事実との関係の様式を現わす範疇が従えられていると考えられる。例えば Austin (1955) の *Performative* な文

- (61) I name this ship the *Queen Elizabeth*⁷⁾

はこの文を発する行為そのものが *Sentence* という事実を示している。すなわち *Performative Verb* はことばそのものが事実であって、言語の外の事実をことばで置き換えることが不可能な動詞である。また、Kimbol (1970)の述べている意味範疇 *Expressive* はわれわれの身体が外的または内的な刺激を受けたときの苦痛の動作に代わるものとしてある表現、例えば 'It hurts' にみられ

る意味で、‘Does it hurt?’ の答えとしての ‘It hurts’ は内省的で Reportive な意味を持つという。Performative, Expressive, Reportive が、Assertive に従えられる意味範疇のすべてであるという保障はないし、Assertive そのものについても十分な説明が与えられたとは思えないが、仮にそのような意味範疇を設けた場合、表層文で最終的に決定される意味解釈に何らかの基礎を提供することができれば、当面の目的は達せられたと考える。

意味解釈規則 1 に続いて次のような規則を設けてみよう。

意味解釈規則 2 (i) 話者の主張の領域は Assertive に直接支配されている S とし、(ii) その文の動詞が不透明動詞でなければ、主張の領域は次に深い補文に浸透し、不透明動詞が現われるまで無限に深く浸透する。

意味解釈規則 3 深層構造で補文の動詞を Command⁸⁾ していた動詞が、表層構造で互いに Command し合う関係になったとき、動詞を含む句は第二義的な主張となる。

上の三つの解釈規則にしたがって話者の主張の領域がどのように決定されるか二、三の例について検討してみよう。例えば(55) a が表層文であるとする、まず規則 1, 2(i) から Telesessions discovered までは主張の領域になり、discover は、[-Opaque] 動詞なので規則 2 (ii) を受けて that an actual moderator is unnecessary も主張の領域になる。(55) b は、規則 1 が適用され、規則 2(i) により an actual moderator is unnecessary が主張の領域になる (Telesessions discovered は文ではなく格下げによってすでに文副詞の位置に置かれているために discovered が an actual moderator と共起関係のある動詞と混同されることはない。) さらに規則 3 を受けて Telesessions discovered が第二義的主張になる。次にいわゆる事実動詞の例について調べてみよう。

(62) Lucy regrets that John wears a red tie.

規則 1 と規則 2 (i) によってまず Lucy regrets までは主張の範囲になり、regret が [+Opaque] 動詞なので規則 2 (ii) は適用されず、Assertive の範囲は補文にまで浸透しない。また、certain のような半透明動詞を主文に含む例

(63) It is certain that John wears a red tie.

の場合は規則 1, 2 (i) (ii) が適用を受けて補文全体が Assertive の対象になる。透明動詞も否定辞を伴わないときは Assertive を補文に通すことができる。例えば

(64) John believes that the U. S. is invincible.

(65) John doesn't believe that the U. S. is invincible.

(64) は文全体が、(65) は n't によって文頭から believe までは Assertive の領域となる。

5.2 補文構造と文副詞の意味的関連性について

補文構造と文副詞の意味の類似性は両者を変形規則で結ぼうとする立場から、すでに何人もの文法家が注目してきた。⁹⁾ 例えば、Schreiber (1970) は文副詞を modal adverbs と evaluative adverbs の二種類に分けた。clearly, obviously, apparently は前者に、unfortunately, predictably, regrettably は後者に属する。modal adverbs は補文構造と同義であり、evaluative adverbs は意味的違いを生ずることから、前者の場合と後者の場合とでは派生の源が異なると考えた。例えば

(66) Clearly, Nixon is beholden to Strom Thurmond.

(67) a. It is clear that Nixon is beholden to Strom Thurmond.

b. That Nixon is beholden to Strom Thurmond is clear.

で(66)は(67) a, (67) b と関係づけられる。一方 evaluative adverb の場合

(68) Ironically, Agnew loves Orientals.

(69) It is ironical that Agnew loves Orientals.

(70) Agnew loves Orientals, and it is ironic that he does.

(71) Agnew loves Orientals, which is ironic.

(68)は(69)よりもむしろ(70)(71)等の文と深い係わりを持っている。すなわち(68)の派生源は(70), (71)の基底構造

(72) [_{S0}and [_{S1}Agnew loves Orientals]_{S1}[_{S2}it [_{S3}Agnew loves Orientals]_{S3}is ironic]_{S2}]_{S0}から派生したものと考えた。Schreiber の分析には二つの困難点がある。一つは, modal adverbs を補文構造から導く場合の意味の同一性の問題である。彼は, 両者は同義だとみなしているが, ある場合に意味の差を生ずることがあることを脚註で述べている。

(i) a. Clearly Hitler was a madman.

b. That's false.

c. He was not.

(ii) a. It's clear that Hitler was a mad man.

b. That's false.

c. He was not.

(ib) denies that Hitler was a mad man, while (iib) denies that the assertion is clear. Similarly, (ic) is normal, after (ia) while (iic) following (iia) seems peculiar……The difference may be related to the fact that *clear* is the surface predicate of the assertion in (iia) while *clearly* is not the surface predicate of (ia) at all.¹⁰⁾

このような意味の差は, 散発的な現象ではなく, 分析の上で無視することができない。Schreiber の取扱いのもう一つの問題は, evaluative adverbs についてである。evaluative adverbs の深層構造が, 想定文と, 想定文を主語とする文との接続文から派生するという見方は, 意味的に動機づけられる一つの可能な見解であるが, ad hocness を含んでいる。例えば, (72) から (71) を導くための S_2 の消去や (70) を導くための, 一種の loose な文代名詞化は, 理由があるが, 仮に「 S_2 に直接支配される要素が, [+Verb, +Adjective] のみであるとき [+Verb, +Adjective] は相応の Adverb に変えられる」という規則を設けることは, 強く理由づけられてはいない。したがって, (68)の深層構造として, (72)に代わりうるものを設定するか, 文形式上の関係も考慮した(68)の新しい深層構造と(72)とを意味解釈的に関係づけるかのいずれかである。どちらを分析の枠組として用いるかを決める前に, 補文構造と文副詞の意味関係を具体的に調べてみよう。意味比較のために, ある文が独立文として現れた場合と, 文に文副詞を伴った場合, それに文が補文として, うめこまれている場合とを考えてみよう。

(73) Jim left early.

(74) Possibly Jim left early.

(75) It is possible that Jim left early.

(73)は Jim left early という事件について, 人づてであれ, 話者の直接の目撃によってであれ, 状況を総合判断した結果, 話者が Jim left early が事実であることを信じていることを示している。(74)は Jim left early が事実であることを条件づきで信じていることを表わす。(75)は二通りの解釈が可能である。一つは Jim left early の論理的な可能性について述べているだけであり, 条件づきであれ, 無条件であれ, 話者が事件が起こったと信じているかどうかは表明しない。もう一つの意味は(74)と同義のそれである。¹¹⁾ ただし(75)の補文の一部が話者に想定された要素を含むとき,¹²⁾ (75)は二番目の意味を持つのが自然である。(75)は補文の想定されている要素の違いにしたがって次の三つの強勢型で読まれ得る。

- (75)' a. It is possible that Jim left early.
 b. It is possible that Jim left early.
 c. It is possible that Jim left early.

それぞれの文で想定されている項目は

- a. Someone left early.
 b. Jim did something.
 c. Jim left at some unknown time.

である。

次に、補文をとる事実動詞とそれに形態的に対応すると思われる文副詞の意味比較をしてみよう。

- (76) It is surprising that he flunked out a couple of times.
 (77) Surprisingly he flunked out a couple of times.

(76)と(77)の意味の違いは明瞭である。(76)は補文 he flunked out a couple of times は想定されており、この文の主張の範囲外に置かれている。一方(77)は he flunked out a couple of times は主張の対象になっている。したがって(76)は話者も聞き手も「彼が何度も退学した」ことを知っている文脈に、(77)は話者がその事実を新鮮な情報として聞き手に伝えようとしている文脈に用いられる。また事実動詞とその文副詞は、さまざまに異なる統語上の行動を示す。例えば疑問文に関して、

- (78) Is it surprising that he flunked out a couple of times?
 (79) *Did he surprisingly flunk out a couple of times?

事実動詞は疑問文に現われるが、文副詞は現われてはならない。また疑問文の答えとして、

- (80) Did he flunk out a couple of times?
 (81) ? Yes, it's surprising.
 (82) Surprisingly yes.

(80)の問に対して(82)は自然な答えであるが、(81)は、yes の後に十分休止を置き、it's surprising を独立の文にしなければ(80)の答えとしては不自然である。

上の例文の考察から、補文動詞と文副詞とはどのように関連づけられるであろうか。これには三つの方法が考えられる。すなわち (i) 統語的關係づけ、(ii) 意味的關係づけ、(iii) 統語・意味的關係づけである。変形文法理論の発達上の標準となったモデルでは、文法形式上の関連性と意味的關係性とを同時に満たすために、「変形は意味を変えない」という大原則をうち立てた。(i) は自然言語の記号的機械的な言語現象の關係づけを目ざした立場である。例えば關係詞と間接疑問文の疑問詞の wh- の行動、Yes-no 疑問文と副詞の文頭への移項に伴う主語の名詞句と助動詞の位置転換等、意味的な関連がなくても、統語的な關係があれば、それを記述してゆく立場である。

(ii) は意味論に属する。(i) と (ii) とは言語の総括的な研究では互いに補足されなければならないことは自明である。そこで、手始めに理論 (iii) を用いて上の事実を説明することにしよう。(75)と(74)、(76)と(77)とは、統語論的観点からすればまったく並行的な關係を持っているといえる。しかし、すでに明らかなように、(75)の一つの読み方が(74)と同義であり、(76)と(77)は意味が異なる。(iii)の立場では(74)と、それと同義の(75)の一つの読み方が關係づけられるにすぎず、(74)と(75)のもう一つの読み、それに(76)と(77)は、統語的に關係があるが、意味的に關係がない文であるとみなされる。このように、意味が同一でしかも統語的関連のある組だけを変形規則が結びつけるのでは、多くの統語的關係のみ存在する組が説明されないまま残ることになる。そこで、変形規則の生産性を高めるために、次のような理論の枠組に修正してみよう。

連鎖 K_i と K_j とが独立の証拠や形態的関連等から統語的に関係がありそれらの意味の同一性や、差異が、深層構造と表層構造と二度操作する意味解釈規則で説明できるとき、 K_i と K_j とは変形規則で結びつけられる。

この修正によって

(83) It is obvious that Jim left early.

(84) Obviously Jim left early.

(85) It is surprising that Jim left early.

(86) Surprisingly Jim left early.

の(83)と(84), (85)と(86) とが変形規則で結びつけられ、これらの組は深層構造で与えられる抽象的な意味のレベルでは同義であるが表層構造で与えられる意味は例えば Assertive の領域に関して異なっていることが意味解釈規則によって説明される。それぞれの文の Jim left early と Assertive の関係を調べてみると(83)では半透明動詞 obvious を介して補文は Assertive の領域に入っており、(85)では不透明動詞の surprising によって Assertive の対象になっていない。一方(84), (86) は、派生源の文の動詞の種類が異なっていたにもかかわらず、Jim left early は両方とも Assertive の範疇に含まれている。表層文に適用される意味解釈規則を認めることによって(86)の文は(85)の基底文から変形によって直接導かれ、Schreiber の提案している派生源、すなわち

(87) John left early, and it is surprising that he did.

の基底形などから導く必要はなくなる。

5.3 要約

この章で述べたことは次のように要約できる。

- (1)格下げ変形、文副詞化変形を適用すると意味の単義化や意味の違いを生ずることがあり、入力文の意味と比較すると、話者の主張の領域が変化することが要因であると考えられることから意味範疇 Assertive を設定した。
- (2)変形規則の生産性を高めるために、統語的關係があれば意味解釈規則が説明できる範囲内での意味の違いを変形規則がもたらしてもよいと考えた。
- (3)意味解釈規則は、深層構造では与えられた文の構成要素の意味が合算され、表層構造では文の最終的な支配関係、線的序列等に起因する意味解釈が与えられると考えた。
- (4)表層構造に与えるべき意味解釈規則の一例である Assertive の意味領域を決定する規則を仮説的に提案した。

＊この論文は1971年国際基督教大学夏期言語学セミナーで口頭発表した原稿に加筆、修正し、一部新たに章を加えたものである。

- 1) 文法関係を図式化した木の形は、格下げ変形に直接に関係しない構成要素は省いたり、内部構造を明らかにする必要のない節点は三角形を用いて簡略化した。例えば believed の過去形の接辞は深層構造では助動詞の節点で過去時制の端子を出しておき後の形態音素規則がこの情報を動詞に付け加える。
- 2) Kajia (1967) p.145 の例文 (16) a 及び b に依る。
- 3) 次の命令文の a の文はそれぞれ b の文から Imperative によって引き起こされた変形によって主語の you と Tense が消去される。ただしこの規則は再帰代名詞化の後に適用され、又否定命令文では主語のみ消去され Tense は do でうめられる。
 - (i) a. Wash yourself !
b. Imperative you Tense wash you.
 - (ii) a. Be quiet !
b. Imperative you Tense be quiet.
 - (iii) a. Don't be noisy !
b. Imperative you Tense n't be noisy.

- 4) 事実動詞は否定辞の not, no, unexpected 等と共に不透明動詞の成員である。
- 5) 格下げされた要素と文副詞は共に SAdv の節点に支配されており、分布上相補的であると言ってよく、又両者は意味的に同義であると考えられる。例えば次の文で
 - (i) a. It is reported that admission of Peking would be carried by a simple majority.
 - b. Admission of Peking, it is reported, would be carried by a simple majority.
 - c. Reportedly admission of Peking would be carried by a simple majority.
 仮に b と c に意味的な開きがあったとしてもその意味距離が b と a, あるいは c と a の意味距離より近ければよいことにする。
- 6) (56) b, (57) b に対するネイティブスピーカー(イギリス人の男性32歳位)の判断は clumsy というものである。
- 7) Austin (1955) p. 5 の例文 (E. b) に依る
- 8) Command の概念については, R. W. Langacker (1969) を参照されたい。
- 9) 補文構造から文副詞を導く変形は, 形態論的意味的に関係があると思われる組 (例えば, apparent : apparently, surprising : surprisingly) を説明しようとするもので, 本来それほど生産的な規則ではないように思われる。
- 10) Schreiber (1971) p. 85 脚註
- 11) (75)に可能な二つの意味は ambiguous といえる程のものであるかどうかはわからない。
- 12) 想定された要素は文強勢を受けず, 主張される要素が文強勢を与えられる。又, 補文全体が想定されるのは, 事実動詞である。例えば, possible, certain, apparent 等の述語は補文に部分的な想定しか含むことが出来ない。

BIBLIOGRAPHY

- 1) Austin, J. L. *How to do Things with Words*. London : Oxford Univ. Press, 1955.
- 2) Bresnan, Joan W. "On Complementizers : Toward a Syntactic Theory of Complement Types," *Lang.*, VI (1970) 291—321.
- 3) Chomsky, Noam. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass. : The MIT Press, 1965.
- 4) Greenbaum, Sidney. *Studies in English Adverbial Usage*. London : Longmans, 1969.
- 5) Hornby, Albert S. *A Guide to Patterns and Usage in English*. Tokyo : Kenkyusha, 1956.
- 6) Kajita, Masaru. *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English*. Tokyo : Sanseido, 1967.
- 7) Karttunen, Lauri. "On the Semantics of Complement Sentences," *Papers from the Sixth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society* (1970) 328—39.
- 8) Katz, J. J. & P. M. Postal. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge, Mass. : The MIT Press, 1964.
- 9) Kimball, J. P. *Categories of Meaning*. Unpublished Ph. D. Thesis, MIT, 1970.
- 10) Kiparsky, Paul. & C. Kiparsky. "Fact" in Bierwisch & Heidolph (eds.). *Progress in Linguistics*. The Hague : Mouton, 1970.
- 11) Klima, Edward S. "Negation in English," in Fodor & Katz (eds.). *The Structure of English*. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice Hall, 1964.
- 12) Langacker, Ronald W. "On pronominalization and the Chain of Command," in Reibel, David A & Sanford A. Schane (eds.). *Modern Studies in English*. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice Hall, 1969.
- 13) Quine, Willard van O. *From a Logical Point of View*. Cambridge, Mass. : Harvard Univ. Press, 1964.
- 14) Rosenbaum, Peter S. *The Grammar of English Complement Constructions*. Cambridge, Mass. : The MIT Press, 1967.
- 15) Ross, John R. "On Declarative Sentence," in Jacobs & Rosenbaum (eds.). *Readings in English Transformational Grammar*. Waltham, Mass. : Ginn & Company, 1970.
- 16) Schreiber, Peter S. "Some Constraints on the Formation of English Sentence Adverbs," *Linguistic Inquiry*, Vol. II, No. I (1971) 83—101.